

「国際柔道連盟試合審判規定の団体戦への全柔連導入について」

平成30年2月3日
公益財団法人全日本柔道連盟
審判委員会

国際柔道連盟（IJF）は、改正した試合審判規定を2018年1月より施行している。

この新たな審判規定をどのように国内大会で適用するかについて全柔連審判委員会において検討し、以下のとおり導入することとした。

国内で行われる柔道大会を団体戦と個人戦に分けて考えてみると、団体戦においては「引き分け」の妙味が伝統的に存在し、IJFの方針（団体戦は「引き分け」がない）とは若干異なるが「引き分け」を残す方向で考える。

【全柔連が定める団体戦の勝敗決定方法】

- 個々の試合においては勝ちの内容に従来の「僅差」を残し、内容順を「一本」「技あり」「僅差」の3種類とし、それに満たない場合は「引き分け」とする。
- 「僅差」とは、双方の選手間に技による評価（技あり）がない、又は同等の場合、「指導」差が2以上あった場合に少ない選手を「僅差」による優勢勝ちとする。1差であれば「引き分け」とする。
 - 「指導」数によって勝敗が決する例＝0対2
 - 「指導」数に差が出て引き分けになる例＝0対1、1対2※ただし、IJF方式にのっとり、試合者Aが「指導」2を与えられたが、終盤試合者Aが「技あり」を獲得すると技評価「技あり」が優先され時間終了時点で試合者Aが勝ちとなる。
- 代表戦は「引き分け」の選手から抽選で1組を選び、時間無制限によるゴールデンスコア方式によって勝敗を決する。（先に「技あり」以上の技評価を得た選手が勝ちとなり、先に「反則負け」を与えられた選手が負けとなる）
- 中学生以下の大会では、従来どおりの「少年大会特別規定」を取り入れて行う。
- 団体戦・個人戦とも大会の趣旨・内容を考慮したうえで、勝者の決定方法や代表戦（任意の選手による等）等の試合方法を別に定めることは可能とする。

本資料は2017年10月26日に公開された国際柔道連盟試合審判規定の対訳版であり、2018年1月1日より国際柔道連盟主催大会において適用される。

日本国内の大会における適用開始時期、方法については別紙参照。

文章の黒字は2017年6月9日版から変更のない部分

2017年11月からの変更部分は青字で標記

2018年1月からの変更部分は白字で標記

世界中の柔道関係者の皆様へ

2018年1月1日から導入される新しいルールについて、皆様にご紹介できることを喜ばしく思います。

柔道選手や柔道を愛する方々、そして世界に対し、より理解しやすく一貫性のあるルールを発信し、競技の内容やイメージを改善していくことは、柔道界のさらなる発展の為、最善を尽くすべき重要事項です。

IJFでは、柔道がより現代的で、傑出した存在であり、皆に理解できるものであるよう、全ての分野における戦略を継続的に見直して参りました。

私は、新ルールの要素と競技方式が、柔道ファミリー、観客、スポンサー、そしてメディアの皆様に対し、多大なる恩恵をもたらすことを確信しております。

国際柔道連盟

会長 マリウス・ビゼール

IJF 理事会作業部会（2017年10月18日）において決定された主なポイント

- ・「技あり」と「一本」の定義。一本の評価基準を再検討した。
- ・ブリッジ、ヘッドディフェンスの定義と全ての事例について。
- ・ネガティブな柔道による「両者反則負け」。
- ・試合場内の主審が的確な判定を下せるよう権限を与え、スーパーバイザー及び審判委員は重大な過誤が見られた場合にのみ介入する。
- ・ポジティブな柔道を引き続き促進していく。
- ・両者が立ち姿勢の状態において関節技、絞技を施すことは禁止する。
- ・寝技から立技への移行を認める。

柔道衣

- ・より効率的に、より良い組み手で組むことができるように、柔道衣の上衣は、きつく縛った状態の帯の中に収まっていなければならない。さらに、選手は、主審が「待て」を宣告してから「はじめ」を宣告するまでの間に、上衣と帯を素早く直すこと。
- ・仮に選手が時間を稼ぐ目的で、柔道衣もしくは帯を乱した場合、「指導」を与える。

試合時間

- ・男女とも4分

試合の決着

- ・規定試合時間（4分）において、試合は「技あり」、もしくは「一本」のテクニカルスコアでのみ決着がつくこととする。
- ・（直接もしくは累計による）「反則負け」を除き、「指導」（1回目、2回目）の違いだけでは勝者を決定しない。
- ・「指導」は、相手のスコアとはならない。
- ・「指導」の上限は3回とし、3回目の「指導」は「反則負け」とする。

ゴールデンスコア

- ・規定の試合時間が終了した時点で両者にスコアがない、又はスコアが同等である場合、「指導」の有無にかかわらず、その試合はゴールデンスコアに移行する。
- ・ゴールデンスコアに移行する前に与えられたスコアならびに「指導」は、ゴールデンスコアに持ち越され、引き続きスコアボードに表示される。
- ・ゴールデンスコアにおいては、スコア（「技あり」か「一本」）又は「反則負け」（直接的又は「指導」の累積による）によってのみ勝負が決まる。
- ・「指導」は、相手のスコアとはならない。

立技におけるスコアの評価

- ・スコアは「一本」と「技あり」のみとする。
- ・一本は、技を掛けるか相手が攻撃してくる技を返して、最適な理合い(*)を伴う相応な技術で、仰向けに相手を投げた場合に与えられる。
- ・(*) “ikioi ” = 力強さとスピードを伴った“勢い” を意味する。
- ・“hazumi ” = 技術、キレ、リズムを伴った巧みさを“はずみ” という。

一本の評価基準

1. スピード
2. 力強さ
3. 背中が着く
4. 着地の終わりまでしっかりとコントロールしている

- ・ローリングに関しては、（背中の一部が）着地してから中断せずに背中が着いた場合にのみ「一本」を与える。

・受が着地する角度によりスコアの評価が変わるが、以下の図のように転がり背中を着いた場合、一本とする（※他の基準を満たす場合）。



※全柔連事務局注：

今回クロアチア・ザグレブにおけるルール検証会議により一本の定義が再度議論され、講道館柔道本来の一本の定義に近づく形で合意された。上記はIJF発行資料の和訳であるが、以下に講道館柔道の本の定義を記載する。

『柔道の本の定義』

「技を掛けるか、又は相手の技をはずして、相当の勢い、あるいははずみで、だいたい仰向けに倒したとき」

スコアの評価

- ・「一本」の4つの評価基準全てを満たしていない場合、「技あり」が与えられる。
- ・「技あり」の評価には、以前の「有効」も含まれる。
- ・「技あり」2つで「一本」（技あり、合せて一本）とし、試合は終了する。

・着地してから動作が一時中断し、その後ローリングした場合、「技あり」を与えることができる。

・受が着地する角度によりスコアの評価が変わるが、以下の図のように転がった場合、技有とする（※他の基準を満たす場合）。



「技あり」

- ・「技あり」の評価は、以前の「有効」と「技あり」を併せたものとする。
- ・投げられる際に両肘又は両手をつき着地した場合、「技あり」が与えられる。
- ・片肘、尻もち、または膝をついて着地し、継続的な流れで直ちに背中を着いた場合、「技あり」が与えられる。
- ・受が肘と手をつき着地した場合、「技あり」が与えられる。



「技あり」ではない



ブリッジ

- ・故意にブリッジの体勢で着地した全ての動作は「一本」とする。



ヘッドディフェンス

・(相手の投技に対して) 背中から着地することやスコアを取られることを防ぐ為、故意に頭部を使用する動作に対しては「反則負け」が与えられる。



故意ではないヘッドディフェンス (取・受双方に罰則を与えない)

・取が投技で相手を投げようと試みた以下のような状況においては特に注意深く判定が行われる。

一 背負落 (注：背負投、一本背負投の形で直下に投げ落とす技)

一 相手の両袖を掴んだまま施される袖釣込腰

一 相手の両襟を掴んだまま施される腰車

上記は例であり、別の投技でも故意ではないヘッドディフェンスは起こり得る

故意ではないヘッドディフェンス (取・受双方に罰則を与えない)

例1：背負落 (注：背負投、一本背負投の形で直下に投げ落とす技)



故意ではないヘッドディフェンス（取・受双方に罰則を与えない）

例2：相手の両袖を掴んだまま施される袖釣込腰



故意ではないヘッドディフェンス（取・受双方に罰則を与えない）

例3：相手の両襟を掴んだまま施される腰車



返し技

- ・返し技において、取（返し技をかける側）が畳に着地する衝撃を利用して技を施すことは認めない。
- ・どちらの選手も明らかに動作をコントロールすることなく、両選手が同時に着地した場合、双方にスコアを与えない。
- ・着地後のいかなる行為も寝技とみなす。

抑え込み時間

- ・10秒で「技あり」、20秒で「一本」とする。

抑え込み

・裏固は（抑え込み技として）有効である。



抑え込み

このような形の抑え方は抑込と認めない。



指導

・相手の脚を過度に伸展して施す絞技・関節技は禁止とする。

・取が絞技を施しながら、受の脚を過度に伸展する状況においては、特に注意深く判定が行われる。

・これらの行為が見られた場合、主審は直ちに「待て」を宣告し、「指導」を与える。



絞技（罰則行為）

- ・自身もしくは相手の帯、上衣の裾、もしくは指だけで絞技を施すことは認められていない。
- ・これらの行為を行った場合「指導」が与えられる。



有効なアクション（指導ではない）

- ・投技の動きが終わり、両選手が明らかに寝技に移行した場合に限り脚を掴んでもよい。立ち姿勢である取（白）は受が寝姿勢であるので、関節技、絞技をかける事ができる。



寝技の継続

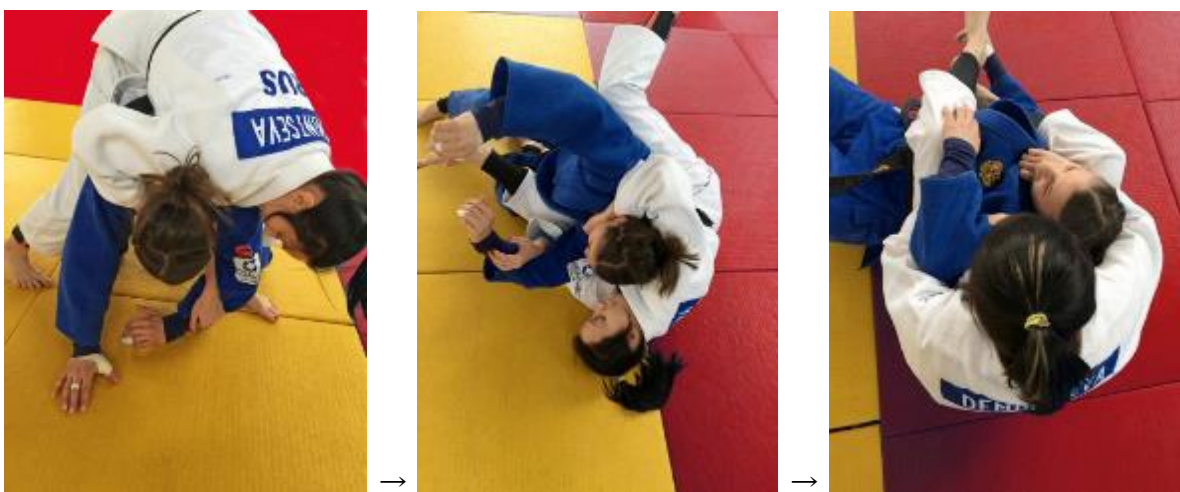
- ・寝技が試合場内で始まり、どちらかの選手の継続した動作により場外に出た場合、「待て」はかけない。

抑え込み

- ・抑込が場内で宣告された場合、(両者が) 場外に出ても抑込は継続される。
- ・場外で寝技(抑込)が施されている時に、受が(※写真のような動作で) 継続性をもって主導権を奪い抑込の体勢となった場合、(※取の抑込を「とけた」とした後、受の) 抑込を宣告する。

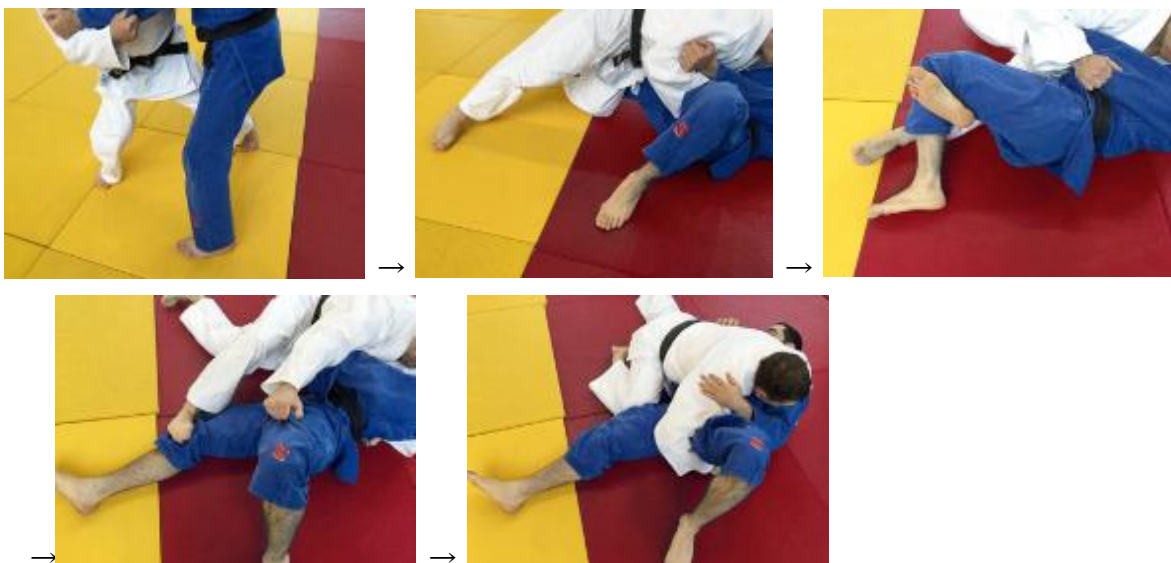


有効なアクション(「待て」を宣告する場面ではない) 絞技

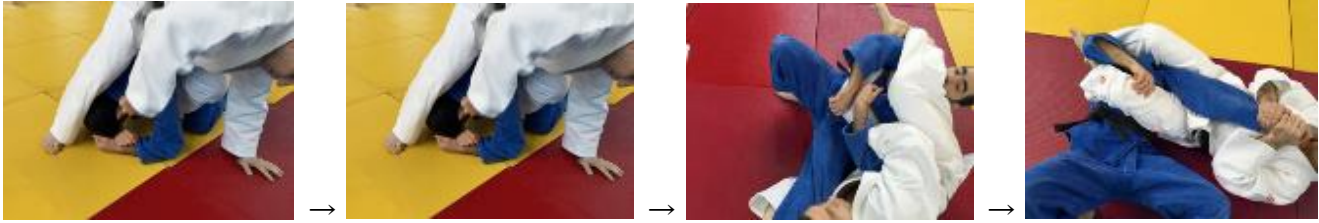


有効なアクション(「待て」を宣告する場面ではない)

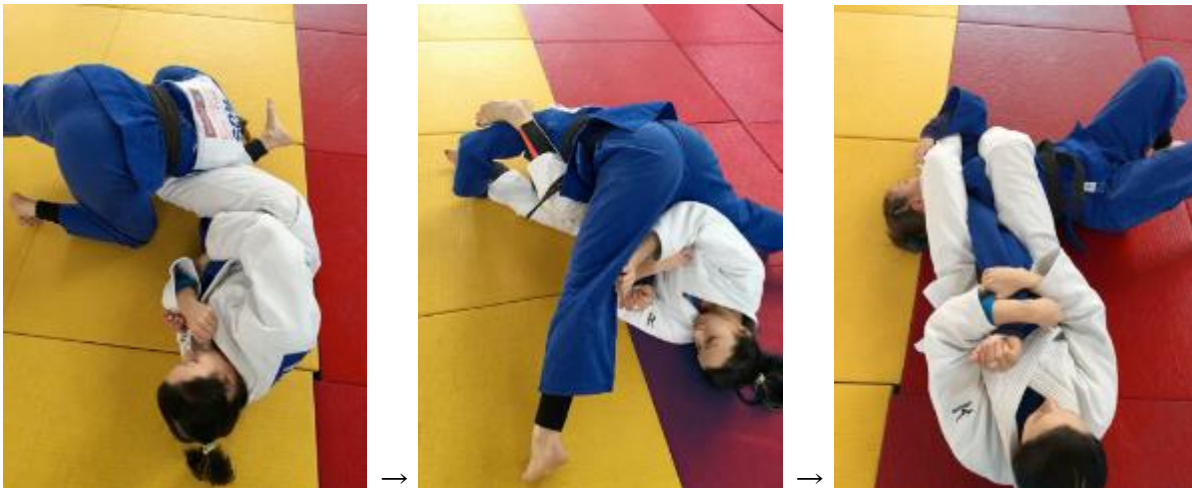
- ・場内で始まった行為については、継続される。



・場内で始まった行為については、継続される。



有効なアクション（「待て」を宣告する場面ではない） 関節技



組み手における適用

・標準的な組み手から攻撃を行うまでの時間は延長し、積極性と進展が認められる限り45秒まで認める。

指導

相手の組み手を両手できる。



・相手の腕や手を叩いて組手をきる。



・相手または自らの柔道衣（裾部分）を帯から出す。



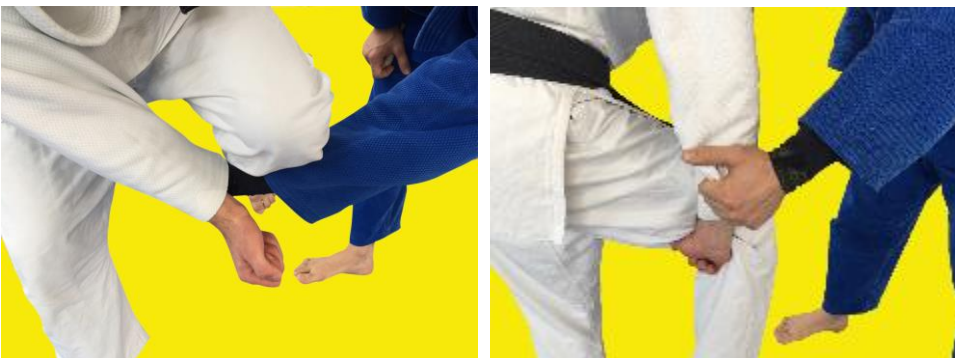
・相手に組み手を持たせないために襟をガードする。



相手の手をブロックする。



脚を使って相手の組み手をきる。



標準的でない組み方

- ・ 審判の判断や、(※選手や観客などの) 理解を簡潔化する為、いくつかの柔道衣の握り方を含む、全ての標準的でない組み方(ピストルグリップ、ポケットグリップ等)は直ちに攻撃をすれば認められる。
- ・ 直ちに攻撃しない場合、これらの組み方に対しては「指導」が与えられる。



- ・ 直ちに攻撃しない場合、これらの組み方に対しては「指導」が与えられる。





ベンディングポジション

・両腕で相手を屈ませるような状態にさせ、直ちに攻撃をしない場合、ブロックをしている行為として「指導」が与えられる。



片足、もしくは両足が場外

片足が場外に出ている場合、直ちに攻撃しない、もしくは直ちに場内に戻らない：「指導」

(アクションなく両足が場外に出た場合)「指導」

「指導」



青の選手が直ちに場内に戻らない、
もしくは直ちに攻撃をしない：「指導」

ベアハグ

・ベアハグを行う場合は、攻撃する選手が少なくとも片方の組み手を持っていなければならない。



・両手同時に（ベアハグの体勢に）組む事は認めない。柔道衣に触れただけでは組んでいるとはみなさない。しっかり柔道衣を握っていること。

有効な握り方



ベアハグ：ダブルポイント

青の選手がベアハグをした後に、もしくは青の選手が1回目の脚取りを行った後、白が青の選手を投げて「技あり」を獲得した場合、スコア（白に「技あり」）に加えて罰則（青への「指導」）が与えられる。

脚を巻き付けるポジション

脚を巻きつける行為は、直ちに攻撃しない場合「指導」が与えられる。



河津掛「反則負け」



脚取り (罰則行為)

・脚取り、もしくは下穿きを掴む行為に対しては、毎回「指導」が与えられる。

・「指導」が3つ累積した場合、「反則負け」となる (脚取り指導2回での「反則負け」の廃止)。



脚取りではない

有効なアクションであり、「指導」は与えられない。



“肩三角グリップ”

寝技の場合、肩三角グリップを施しても良い。



寝技において、脚で相手の体を固定し肩三角グリップを施すことは禁止行為であり「待て」が宣告される。



立技における肩三角グリップは「待て」が宣告される。



寝技の定義

両選手の両膝が畳に付いている場合、寝技とみなす。



(立技から動きの流れが止まった場合や、寝技で攻める意志がなく) 相手と一切接触がない場合「待て」が宣告される。



腹ばいになった場合、青の選手は寝姿勢とみなされる。



立ち姿勢の選手（写真：白）が組手を制御している場合、膝をついている選手（写真：青）も依然立ち姿勢の状態であるとみなし、投技の規定が適用される。
ただし、白が直ちに攻撃しなかった場合、主審は「待て」を宣告する。
膝をついている選手（写真：青）は、投げられるのを防ぐために白の脚を掴む（※その他脚取りに該当する行為）ことはできない。もし、そのような行為を行った場合は指導が与えられる。



関節技・絞技をかけたてはいけない場面

・両者が立ち姿勢の状態関節技、絞技を施すことは禁止する。直ちに「待て」を宣告し「指導」を与える。



投技が有効な場面

・取（青）は捨身技をかけた後、以下の様な体勢の時に寝技へ移行できる。



・以下のような体勢において取（青）は投技を施すこともできるし、寝技（関節技、絞技、抑込）にも移行できる。



ネガティブ柔道 (SOR 第23条)

- ・3つ目の「指導」を同時に受けた場合（通常の試合時間及びゴールデンスコア）、「両者反則負け」となり、両選手は大会から失格となる。
- ・直接的「反則負け」が両選手に与えられた場合、IJF ジュリーが対応を決定する。
- ・失格となり得るような非道徳的な行為が選手にあった場合、IJF は選手をその大会から除外することができる。

重要

スコアや罰則をどちらに与えるかが明確でない場合、フェアプレー精神の観点からいかなる決定も下さず、選手が試合を継続することが望ましい。

国際柔道連盟試合審判規定改正に伴う国内大会への適用について

2017年11月に国際柔道連盟（IJF）より審判規定改正の骨子が発表され、その後、NFに対して改正内容が通知された。更に1月にアブダビにおいてIJF主催による審判・コーチセミナーが開催され、改正内容の説明が行われた。

これを受け、審判委員会として国内大会への適用を以下のとおりとしたい。

1. 大会への適用

- ① 平成30年4月1日より全柔連単独主催大会では原則として改正された国際柔道連盟試合審判規定を適用する
対象大会： 全日本選抜体重別選手権大会
全日本カデ体重別選手権大会
全国教員大会
全国小学生学年別大会
全日本ジュニア体重別選手権大会
マルちゃん杯全日本少年大会
講道館杯全日本体重別選手権大会
- ② 実行委員会のある大会においては実行委員会の判断に委ねる
対象大会： 皇后盃全日本女子選手権大会
全日本選手権大会
全国少年大会
全日本少年少女武道錬成大会
全国高等学校選手権大会
近代柔道杯全国中学生大会
- ③ 共催大会においては①の方針を申し入れ、関係団体と協議の上、決定する
対象大会： インターハイ柔道競技会
全国高等学校定時制通信制大会
全国中学校大会
国民体育大会柔道競技会
- ④ 上記大会の中で、団体戦や少年大会特別規定を適用する大会については適用方法を別途審判委員会で検討する

2. 審判規定の伝達等

- ① 審判強化研修会の実施
 - 2月4日 講道館
- ② Aライセンス審判員研修会の実施
 - 2月17日 大阪講道館
 - 3月3日 講道館
- ③ 大会参加者への伝達
 - 全日本選抜体重別選手権前日代表者会議
 - 全日本カデ体重別選手権前日選手説明会
 - 皇后盃全日本女子選手権前日選手説明会
 - 全日本選手権前日選手説明会

平成30年2月3日
審判委員会委員長 大迫 明伸